

# 「宇野理論を現代にどう活かすか」Newsletter

(第2期第2号—通巻第15号—)

## 特集論文2

田中英明

(滋賀大学 [tanaka@biwako.shiga-u.ac.jp](mailto:tanaka@biwako.shiga-u.ac.jp))

書評 櫻井毅・山口重克・柴垣和夫・伊藤誠編著

『宇野理論の現在と論点——マルクス経済学の展開』

(社会評論社, 2010年)

## 「Ⅱ 方法論の展開」

『宇野理論を現代にどう活かすか Working Paper Series』

2-2-2

[http://www.unotheory.org/news\\_II\\_1](http://www.unotheory.org/news_II_1)

「宇野理論を現代にどう活かすか」Newsletter

事務局：東京都練馬区豊玉上1-26-1 武蔵大学 横川信治

電話：03-5984-3764 Fax：03-3991-1198

E-mail: [contact@unotheory.org](mailto:contact@unotheory.org)

ホームページ <http://www.unotheory.org>

## 要旨

本書の「Ⅱ方法論の展開」では、以下のように実に多様に宇野理論の方法が「展開」されている。大黒弘慈（第1章）は、宇野理論の形成過程を大胆に考察し、その原理論のうちに、本質や分析基準にとどまらない近代批判としての可能性を探り出そうとしている。新田滋（第2章）は、宇野三段階論の保存＝封印という表現で、社会構成体の解釈枠組みとしての特権性を明確にしつつ、パクス・アメリカナ期を対象とした多層的な諸理論の体系化に取り組もうとしている。小幡道昭（第3章）は、宇野の「純化・不純化論」を、一度限りの歴史像とするのではなく、変容を引き起こす契機とした原理論の再構築の必要を説き、「開口部」の理論化を打ち出している。山口重克（第4章）は、小幡の宇野解釈を批判し、支配的資本の蓄積様式論＋世界経済の構造・枠組み論によって段階＋サブ段階へ区分し、その特徴を類型化するという方法での宇野段階論の継承を考えている。横川信治（第5章）は、宇野理論における進化論的・非還元主義的な視点に着目し、「特殊中間理論」とその「中間理論」への統合によって、歴史と理論の再統合をはかるとしている。ここでは、厳しい紙幅の制限のなかでそれぞれに展開される壮大な議論を、少しでもその特徴が明確となるように、時に著者による他の論稿や旧稿も利用しながら読み進め、若干の疑問とともに、著者への期待を提示している。

## I. はじめに

「宇野弘蔵没後30年研究集会」を契機に誕生した上記著作<sup>1</sup>の第Ⅱ部は、「方法論の展開」と題され、大黒、新田、小幡、山口、横川の各氏の論稿が収められている。この諸氏は世代や年齢という点で幅があるばかりでなく、宇野とのスタンスの取り方や理論的立場から、叙述のスタイルまで多様である。この本の「はじめに」には、編者によって「宇野理論に初めて接する初学者のために」簡明な解説が与えられている。しかし、そうした「初学者」はここⅡ部に至って、茫然と立ち尽くしてはいないだろうか—それぞれが「宇野理論」として論じているものが、はたして何であるのか、あるいは、「宇野」とは難解を意味する形容詞であったのかと。

もとより「方法論」という派手やかな空中戦の展開する領域を苦手とする評者ではあるが、「自称宇野派」の資格すら剥奪されるのではないかと懸念に怯え、冷や汗をかきつつも、まずは読み進めていくこととしよう。

---

<sup>1</sup> 櫻井、山口、柴垣、伊藤編著『宇野理論の現在と論点—マルクス経済学の展開』社会評論社、2010年。以下では、この書への参照は頁数のみを記す。

## Ⅱ. 大黒弘慈「宇野理論形成の思想的背景—純粹と模倣」

第1章「宇野理論形成の思想的背景—純粹と模倣」で大黒弘慈は、「宇野理論自体を、いまだ形成途上にあるものとして『方法的に模写』してみる」(106頁)という方法を試みる。1935年の「資本主義の成立と農村分解の過程」での日本資本主義論争批判から、36年の『経済政策論・上巻』でのヴェーバー批判、41年のバジヨット『ロンバード街』の翻訳、48年の『資本論研究』での価値形態論への「人間」の導入と宇野三段階論の形成過程をたどりながら、宇野を現代に活かす道筋を示そうというのである。

もっとも、大黒の関心は宇野解釈そのものというよりも、原理論を、宇野が「純粹資本主義論」を構想せざるをえなかった背景、当時の思想状況の中に置き直すことで、「本質」、「分析基準」にとどまらない近代批判の側面を点描するところにある。あるいはむしろ、スピノザやカントらの再評価といった現代的な思想状況の中に、というべきであろうか。そのためであろうか、宇野解釈をめぐる大黒の議論展開は、かなりアクロバティックなものとなっている。大黒は、宇野の問題認識を大胆に探っていくことで、歴史的多様化を捉える「基準」を本質とした「純粹資本主義論」には絞り込めない、①経済学的認識の対象の限界と、②純粹化から逆転への移行を駆動する矛盾(との内面的な関連)との、二面における分析対象への批判意識の側面を原理論のうちに描き出そうとしているのである。

たとえば大黒は、宇野が、貨幣に限界効用がないという論点にかかわって左右田喜一郎の名に言及していることに着目する(114頁)。大黒はまず左右田がカント的な分析論理の二元性が、われわれに世界総体の認識を求めて「無限彷徨」を強いると述べているとしたうえで、貨幣に限界効用説が成り立たない理由を、貨幣が当事者を「彷徨左右」する浮遊的な「心理状態」に陥れるからだとする左右田の説明を示す。そのことから、この宇野による左右田への言及に拠って、カント的な分析論理の立場の徹底により、経済学的認識の対象界の限界を炙り出そうとしたとされる左右田の認識論的批判の宇野への影響を認めようとするのである。

こうして得られた「宇野の社会主義イデオロギーもまた、純粹資本主義という認識対象の限界を炙り出し、これを浮遊状態に陥れ、この限界を超越するための『嚮導概念』ないし『認識目的』として、原理論成立の強力な条件をなしているということではできらう」(116頁)という結論はやはり難解である。また、大黒自身の積極説の提示としても、対象の客観的・科学的認識への志向が対象界への安住に墮しているのではないかという経済学的な認識・分析者側の問題と、合理的経済人そのものに刻み込まれた矛盾・限界といった当事者側の問題との相違と関連とが明確になっていないのではなかろうか。

また大黒は、宇野の資本主義認識の基底に「資金の商品化の矛盾」(113頁)があるとし、資本主義の自己矛盾としての「資本の過剰」に対する、貸付資本の社会的性格によるコントロールという宇野の言説を、人民戦線事件後の休職中に、翻訳の対象として宇野がバジヨット『ロンバード街』を選択した事実を拠って、中央銀行準備金の「矛盾に満ちた性格」(マルクス)を媒介に、中央銀行の裁量的政策と結びつける。そうして、循環と移行の二つの弁証法の結節点を、「資本と社会の矛盾」(117頁)を表す貨幣・信用論的矛盾により強く現れるとするのである。

これも大黒自身が幾重にも留保を付さざるをえない推論ではあるが、「純化・不純化を継起的にではなく資本主義に不可欠の同時的なモメントとして原理論に反映させ」（108頁）ることを意図し、「資本と社会の矛盾」として貨幣・信用論に目を向けようとする大黒の着想自体は魅力的である。

確かに、社会的再生産の全面的な包摂という前提条件のもとでは、「社会的」なものは個別的・私的なものの単なる合計にとどまり、産業資本の「私的性格」と対比された「社会的性格」をもつ貸付資本によるコントロールという宇野の理解も、資本主義の自己再生産の原動力としての「循環の弁証法」の次元で解されることとなろう。しかし、資本主義的な組織化の部分性、あるいは大黒のいう「純粋と不純の複層」（108頁）といった原理像の再構築は、「資本と社会の矛盾」の性格を大きく変えていくにちがいない。

## Ⅱ. 新田滋「宇野三段階論の保存＝封印－宇野原理論の多層性とそのアンバンドリング」

第2章「宇野三段階論の保存＝封印－宇野原理論の多層性とそのアンバンドリング」は、新田滋が宇野弘蔵没後30年研究集会での討論に触発を受け、「戦間期以降のパクス・アメリカナ期」の現状分析という視角から取り組んでいる宇野三段階論の体系的な再構成の作業のうち、原理論の次元についてまとめたものである。

新田はまず宇野原理論の中を、いくつかの社会構成に共通する論理（＝循環法則論）、あらゆる社会構成に共通する論理（＝経済原則論）、パクス・ブリタニカ期にのみ特有の論理（商品・貨幣、資本の範疇論）等々に仕分けする必要性を指摘する。そして、株式会社、独占・寡占、公的機関による規制・介入を捨象した純粋資本主義社会でのみ循環法則の存立を認める宇野と異なり、株式会社の組織内部や公的機関の政治過程の純粋資本主義社会への「内面化」や、長期的ないし論理的な次元での独占・寡占から自由競争への回帰といった論理によって、パクス・アメリカナ期の社会構成についても循環法則が認められるとする。ここから新田は「パクス・アメリカナ期にもいわば第二類型の原理論が成り立つと考えられるべきなのであろうか」（123頁）という問いを立て、それに自ら否定的な答えを出しつつ、宇野原理論のパクス・ブリタニカ期への保存＝封印という結論を導くのである。

しかしながら、そのパクス・アメリカナ期の「第二類型の原理論」こそが、旧稿<sup>2</sup>で示されていた新田自身の見解でもあった。そこで、ここでは第2章をその旧稿と比較しながら読んでいこう。

旧稿では先述と同様の独占や公的機関等を含んだ循環＝構造なものの再定義から、パク

---

<sup>2</sup> 新田滋「宇野三段階論の再構成－宇野弘蔵没後30年記念研究集会に触発されて考えたこと－」（「マルクス経済学の現代的課題研究会」2008年春季合宿研究会報告）。ただし、利用したのは事前にメーリング・リストで配布されたもので「未定稿」と表記されている。

ス・ブリタニカ期とパクス・アメリカナ期の二つの資本主義的な社会構成に共通する原理論Ⅱの抽出が説かれていた。そしてパクス・ブリタニカ期に固有の法則論的原理論Ⅰ・1に対し、パクス・アメリカナ期に固有な原理論Ⅰ・2という層が位置づけられ、ほとんどの社会構成に共通する個別的な法則論的原理論Ⅲの層と、あらゆる社会構成に共通する原則論Ⅳ-1,2,3の層とをあわせ、

パクス・ブリタニカ期の資本主義社会構成に関する「三段階論」

原理論Ⅰ・1・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ-1,2,3→小段階論→現状分析

パクス・アメリカナ期の資本主義社会構成に関する「三段階論」

原理論Ⅰ・2・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ-1,2,3→小段階論→現状分析

といった体系的整理がなされ、パクス・アメリカナ期の「第二類型の原理論」が考えられていたのである。

ところが、この図式的明快さとは裏腹に、他方で原理論Ⅱは資本主義的社会構成の広範な諸局面に対して、かなりの程度において直接的に「分析基準」となることができるとされ、「原理論Ⅱと現状分析の二段階論」とも位置づけられていた。先述のように原理論Ⅱにおける「共通」とは、二つの社会構成からそれぞれに固有なものを捨象するというのではなく、この第2章では資本主義的循環法則論についていわれている「市場的關係と組織的關係、自由競争と独占・寡占の循環=構造、自由放任と公的介入の循環=構造を包括する、より広範囲のものとして再定義」（123頁）された「純粹資本主義社会」の原理を意味していた。それは第1章で大黒が（梅本に拠って）いうところの「移行」を含んだ理論領域ということになるのか。そこで、こうした理論が得られるならば、後は多少なりとも理論的な作業といえども—おそらくはこの原理論Ⅱを基に特定の生産力水準等を歴史的 premise にして与えられる原理論Ⅰ・2さえも—「歴史分析・現状分析の結果を宿約表現したモデル」という性格を濃厚に有することになるというのであろう。

また、宇野の原理論はいうまでもなく、原理論Ⅱのような層を前提することなく、宇野自身の純粹化傾向論・方法模写説に依拠したものであり、したがって宇野原理論を原理論Ⅰ・1として保存=封印すべきとする新田の主張も、もとより上記の図式への組み込みを意図したものではなかった。

そこでこの第2章では新田は、パクス・ブリタニカ期に固有の範疇論の層のみを「原理論としての原理論」と呼び、循環法則論の諸層については、原理論という呼称を避けている。そうすることによって、パクス・ブリタニカ期に保存=封印するという主張が、宇野原理論が、三段階論=純粹化傾向論=方法模写説とワンセットとなって、この国家からの経済過程の自立化という特質をもつ特殊な社会構成体を対象としていることによって、経済審級における諸範疇のみならず「政治審級、イデオロギー審級の諸範疇についても、それが純粹化された状態で抽象化」（125頁）しうる社会科学方法論的に特権的な範疇論たりえているという理解によるものであることがより明確となったのである。

とすれば、分析基準から、「あらゆる社会構成を歴史—社会理論的に分析するための基礎的な解釈枠組み」（128頁）へと位置づけを変えた「原理論としての原理論」に対して、現状分析のための分析基準としての諸「循環法則論」は具体的にはどのように再構成されていくことになるのであろうか。

旧稿では、パクス・アメリカナ期の原理論が意識され、多層的な諸要素の原理論体系としての論理的な展開順序の再構成が探られていたが、ここでは原理論そのものの範疇論＝解釈枠組みへの封印によって、二段階論的な分析の基準としての性格がより強められているのであろうか。「より広範囲のものとして再定義」された「資本主義的循環法則論」が、体系的な大理論を志向するのか、はたまた多様な歴史的条件を加味した中間的な諸理論の束ないしは工具箱のようなものとなっていくのか。そして、「さしあたり世界システム論を中心として新制度学派その他の諸理論を無手勝流に」（119頁）使うしかないとしてきた新田の考えそのものは変化していくのか、注目していきたい。

### Ⅲ. 山口重克「小幡道昭の宇野理論批判」

第3章「純化傾向と体系的純化」は、小幡道昭が、宇野弘蔵没後30年研究集会での報告や、それに基づく論稿<sup>3</sup>と同様に、宇野理論の段階論・原理論の方法を批判し、変容論としての原理論の再構築の必要を説いたものである。なお、本書の第4章「小幡道昭の宇野理論批判」は、山口重克が、その小幡[2008]の主に前半部分を検討したものであり、先にこの第4章の山口による批判の検討を通じて小幡[2008]の議論の骨格を確認し、それとの対比をふまえて第3章を読んでいくこととしたい。

第4章で山口は、小幡[2008]の前半部分を「宇野理論に対する牽強付会の誤解釈にもとづく方法論批判と、いわゆる資本主義の逆流＝『大地殻変動』論にもとづく新方法論の提唱」（145頁）と総括しているが、注意深く読んでみると、小幡の議論はおそらく山口による解釈よりもさらに屈折しており、また異なる意味で不可解な部分を含んだもののように思われる。そこでは小幡は、グローバリズムの基底は新興経済圏の台頭であり、この大地殻変動によって今日の資本主義はすでに宇野の段階論では捉えきれない世界にあり、そのために原理論そのものの再構築が必要となっていることを示そうとしている。

まず新興経済圏の台頭の第一のインパクトとして、「(1)商業革命をベースとした規定と(2)産業革命をベースとした規定」（小幡[2008]78頁）の二重性をもった資本主義の起源の問題が論じられる。山口は(1)を流通主義、(2)を生産主義と名付けた上で、ここでの小幡の議論は「流通主義と生産主義を二律背反的、二者択一的な起源論だとみて裁断を下す…短絡的な議論」であり、「マルクスないし宇野理論をあえて生産主義だと決めつける」という「批判のための仕掛的な為にする誤解釈」とであると批判している（148-149頁）。しかし、そもそも「起源の二重性」が『資本論』における二重の記述から取り出されているように、小幡においても、マルクスや宇野の歴史認識としては両者が併存していることは前提となっている。小幡が問題としているのは歴史認識ではなく、『資本論』のコアである資本主義の原理想であり、またそれによって描かれる資本主義の基本像であろう<sup>4</sup>。その点では、「宇

<sup>3</sup> 小幡道昭「純粹資本主義批判—宇野弘蔵没後30年によせて」東京大学『経済学論集』第47巻第1号、2008年。以下ではこの論稿を小幡[2008]と表記する。

<sup>4</sup> 「宇野自身の資本主義像では第二の起源がその根本をなしている」（小幡[2008]79頁）といわれているときの「資本主義像」も、宇野の歴史認識そのものではなく、「労働力の商品

野理論が生成当時から主流派から流通主義と呼ばれたことからもある程度推測できるように」(149頁)、少なくともマルクスの正統的な継承を重んじる立場では、「流通主義」が批判的レッテルとして流通すると思われてきた程度には「生産主義」的な解釈が主流であった。そして、小幡の主張は、山口のいうように「流通の役割の重視」から「原理論において流通論を生産論から独立させた」(同) 宇野の理論上の貢献が、果たして十分なものであったのかが、今日の新興経済圏の台頭によって問われているというものである。

山口は、流通論次元で商業機構や金融機構をもう少し詳しく展開する必要は認めつつも、「『生産』との関連は度外視しない方がよい」(150頁)といったことから「従来の原理論の内容を多少微調整すればすむ話」(151頁)としている。だが、市場の諸機構が産業資本の分化といった形でもっぱら「生産」との関連という視角から説かれてきた原理論において、「商品経済そのものがもつ固有の組織性、商業、金融の機構的發展の独自性」(小幡[2008]80頁)を解明しようとする試みは、「微調整」にとどまらない見直しを必要とすることになる。

次に小幡は、新興経済圏の台頭の第二のインパクトとして、帝国主義の〈部分性〉命題に対する世界史的転換を論じ、帝国主義という段階規定の無効化を説いている。この部分の小幡の議論を山口は、「冷戦期の資本主義を没落期とみていた宇野段階論では新しい資本主義の台頭は予期できなかった事態だったということなのだろう」(151-152頁)と解釈している。しかし、ここで小幡が「三段階論が予期しなかった」としているのは、「冷戦期」を「没落期」と規定したがゆえに「新しい」ものの台頭が予期できなかったということではない。「帝国主義段階論の核心」とする「ドイツ＝典型説」のやや独特な理解によるものである。小幡は、「対内的に農民層や独立小生産者を温存すると同時に、対外的には他の諸国の資本主義化を抑圧するかたちで進む。局所的な資本主義發展が必然的に周辺の植民地化をうみだす」として、「内的不純化と外的部分性」を「ドイツ＝典型説から導出される帰結」とする(小幡[2008]80頁)。そのうち「内的不純化」についてみれば、新自由主義への変質を意味する「資本主義の逆流＝『大地殻変動』論」と解されうる面もあろう。だが、ここでの新興経済圏の台頭によるインパクトが直接かかわるのは「外的部分性」の方であり、周辺諸国の植民地化、資本主義化の抑圧を生みだす対外的な帝国主義政策が、東西冷戦下の「低開発の開発」に転じてもなお妥当性を有していたこの部分性命題が、資本主義化を抑圧されているはずの新興経済圏の急速な發展という状況によって有効性を失ったというのである。

小幡の議論で注意が必要なのは、ここで実際に論じられているのは、宇野弘蔵自身の所説というよりも、広く受容され影響力を発揮し続けてきた「宇野理論」ないし「宇野段階論」なるものとなっている点である。小幡は、日本の経済成長が「後発資本主義の優位性」(小幡[2008]78頁)を発揮しつつ、「周辺諸国・諸地域の資本主義化の抑制をバネに進展」(小幡[2008]80頁)したことで、ドイツ＝典型説の一類型としての説得力を持ち続けたとして、宇野の段階論が「日本の戦後高度成長を背景に流布していった」(小幡[2008]78頁)とする。「日本経済が低迷する80年代末まで、宇野段階論の水脈は国家独占主義、福祉国家

---

化を資本主義の核心と見る立場から」(同)、「純粹資本主義」への接近と離反の過程として描かれた構図を意味していると思われる。

型資本主義，法人資本主義，等々，さまざまに改訂されながら，財政制度，労働慣行，企業組織，等々の非商品経済的な要因を巧みに取り込みながら，後発資本主義国が先発資本主義国を凌駕する歴史の説明原理として，リアル・タイムで有効性を発揮してきた」（小幡[2008]78頁）のであり，今日の新興経済圏の台頭によって見直しを迫られているのは，そうした「宇野段階論」なのである。

また，原理論と段階論との連関では，まず眼前の帝国主義段階の説明のために溯って段階構成が仮構され，それを基礎づける原理論が要請されるという「直感的認識」を出発点とする面と，「原理論の主要命題を改訂すれば，資本主義の歴史像も自ずと変容せざるをえない」（小幡[2008]77頁）という「論理的命題」の面が指摘されている。上述の新興経済圏をめぐる議論は前者の「直感を基礎とした一種の史観の問題」（同）に事実上終始しており，その直感を受け容れたとしても，「この歴史像を支えている資本主義の原理像から再考するほかない」（小幡[2008]84頁）というのは，いまだ歴史認識からの要請の次元であろう。ただし，原理論からの内的な展開としては「ドイツ＝典型説は純粋資本主義論を基礎としている」ことが明らかとなっていないからである。山口が，三段階論が有効性を失ったとしても，「そのことから原理論を見直さなければならないということにはなるまい」（158頁）としているのも，この点を衝いたものであろう。

#### IV. 小幡道昭「純化傾向と体系的純化」

第3章では小幡はまず，現在進行中の新たな大転換を，「大きなプレート（グローバリズム）と，そのうえでの地殻変動（新自由主義）という二重の運動」に分離し，新自由主義の退潮如何にかかわらず，19世紀末にはじまった帝国主義というプレートから，「冷戦体制のもとで西からも東からも低開発を強いられてきた地域・国家における資本主義的發展」（134頁）というマグマに突き動かされた新たなプレートへの交替は進んでいるという認識を確認する。そして，先の自由主義から帝国主義へのプレートの転換を直視し経済学方法論のうちに反映させたのが，宇野の「純化・不純化論」であり，新たなプレートの転換はもはや「一度限りの『不純化』に還元」（135頁）すべきものではなく，「純化・不純化論のなかに眠る変容論を呼び覚ます」（同）ことが必要だということである。

次に小幡は，ここでは宇野の『経済学方法論』<sup>5</sup>のテキストを「薄皮を剥ぐように」（135頁）分析し，宇野の「純化傾向」と「体系的純化」の区別を以下のように論じている。

宇野が，18世紀後半以降ではなく17世紀以来の「商品経済的純化の傾向」に基づく抽象が必要だとしていた点に，つねに外部から作用し続ける外的条件による阻害と，「政治的助力」等によるその処理という「純化傾向」の意義を読み取りうる。ところが他方で宇野は，自由主義段階に至ると「政治的助力」も邪魔となり「自力」だけで「純化傾向」が貫かれるとすることで，外的条件の処理の問題を，その背後の力に分析のメスを入れないまま「純化・不純化という歴史的現象として原論の外部に放逐」（140頁）してしまった。

<sup>5</sup> 宇野弘蔵『経済学方法論』東京大学出版会，1962年（以下では宇野[1962]と表記）。



また、「体系的純化」については、その方法が積極的に示されていないことが問題であり、宇野が『資本論』の窮乏化説を典型例としていることがその一因となっている。マルクスの窮乏化論は単なる具体的諸現象の叙述ではなく、れっきとした理論であり、その原理論からの排除は「理論の前提条件の適否」による取捨という「純化傾向」の問題だからである。そこで、「株式資本」を取りあげると、「商品経済的な観点だけで導出できるかどうか、という原論的推論の可否の問題」（141頁）で純化・不純化を識別するところに、宇野の「体系的純化」の独自の意義があることがはっきりする。

そのうえで小幡は、「株式資本は宇野の主張に反して、原理的に説明できる可能性がある」とし、その場合、〈原理を逸脱する株式資本が支配的になった＝資本主義の不純化〉と判断する宇野の方法論に及ぶ影響として、「純化・不純化という考え方を捨てる」ことで株式資本を「原理論の内部に収める行き方」とともに、もう一つの方向として、純化・不純化を「さらに抽象化」して、「個人資本家と結合資本（株式資本）の分岐条件を明らかにする」かたちで、「変容一般の契機を導入する方向で原理論を拡張する行き方」を打ち出す（同）。

こうした検討をふまえて小幡は、商品経済的な作用が外的条件に分解作用を及ぼし、また逆に外的条件の作用が商品経済的な原理を制約する領域や、外的条件の導入によって市場構造の分岐が現れる領域という、「原理論の内部からみて、変容を引き起こす契機が作用する部分」（143頁）を「開口部」と呼び、「変容の原理に焦点を当てた理論の再構築」（144頁）を主張するのである。

このように、この第3章では原理論の見直しの必要が、純粋資本主義論と純化・不純化論との結びつきから説かれている。グローバリズムというプレートの大転換の再現が、一度限りの純化・不純化という歴史像を無効にしたことで、それを支えている純粋資本主義論も再考を免れないというのである。しかし、純粋を基準に識別される「不純化」そのものには特定の方向は含まれず<sup>6</sup>、したがって「純化」以外のいかなる現状認識によっても不純化の傾向は否定され難い<sup>7</sup>。そのため、歴史的傾向から原理論を分離して体系的純化をはかる立場からすれば、「一度限りの不純化」という歴史像は必然的なものではないからこそ類型論としての段階論であり、現実の変化によって「原理論を見直さなければならないということにはなるまい」ということになろう。ここでも、直感的な歴史認識から原理論の再考の必要性を示す試みは成功しているとはいえない。

しかし、この第3章の後半では、原理論の内部における外的条件の処理を、いわゆるブラック・ボックス化にとどまらず、徹底的に理論化しようとする試みが例示されていた。「原理論の主要命題を改訂すれば、資本主義の歴史像も自ずと変容せざるをえない」のであって、求められているのは、資本主義の原理像の再構築を通じて、現在の資本主義への新たな理解を獲得せんとする論理的・演繹的な方法への意志の回復であろう。

すでに小幡原論<sup>8</sup>によって、9箇所もの「開口部」の理論と、「循環」ではなく「相」及び

---

<sup>6</sup> その意味では、先に引用した大黒の「純粋と不純の複層」（108頁）という表現にも違和感を禁じ得ない。

<sup>7</sup> 先の論稿では、「ドイツ＝典型説」の核心を、周辺諸国の資本主義化を抑圧する「外的部分性」という特定の方向性で捉えていたことで、「逆流」とは異なるかたちで不純化傾向の否定がなされていた。

<sup>8</sup> 小幡道昭『経済原論－基礎と演習』東京大学出版会、2009年。

「相転移」としての原理化といった試みが提示されている。こうした「資本主義の変容を引き起こす諸契機の理論化」(144頁)を深めていくことで、段階論への演繹的なつながりもまた取り戻されることになるろう。

## v. 横川信治「制度派マルクス経済学の歴史的アプローチ」

第5章「制度派マルクス経済学の歴史的アプローチ」で横川信治は、歴史学派や旧制度学派の「歴史的アプローチ」とマルクス経済学との統合を提起している。この章の後半で横川は、恐慌の形態にかかわる「様式化された事実」に対し、ボーモルのコスト病、チャンの動学的比較優位説、ミンスキーの金融不安定化仮説などからそれぞれに作業仮説としての「特殊中間理論」を開発して説明している。それらの分析自体もたいへん興味深いものであるが、そこから、それらを統合した「より一般的な概念図式」(マートン)として「資本主義の進化を説明する中間理論」(160頁)がどのように構成されるのかが注目されよう。

横川は、先にみたような小幡のアプローチが、歴史と理論の統合を「原理論から演繹的に」果たそうとするのに対して、「私は段階論から帰納的に、歴史と理論の関係を統合しようとする」(167頁)と述べる。その背景には、現代制度派のホジソンに拠った「還元主義」と「目的論」に対する批判がある。ホジソンの「複雑な現象を1レベルまたは1タイプの理論で全面的に説明可能であるとする考え方」(161頁)とした定義に合致した理論であれば、確かに「還元主義」であるとしても、ここでは宇野の理論の一面として、「還元主義の要素」や、また「『目的論』の要素」(162頁)が見出されることが、批判の対象となっている。だが、体系内に現象を規定する力ー全面的にではなく一つの要因としてであつてもーを認めようとする、およそ演繹的な理論的営為であれば、この還元主義や目的論の「要素」が見出されないものがありえようか。

実際、宇野の理論に目的論「的」・還元主義「的」視点と、これらを排除した進化論的で非還元主義的な視点とが併存しているとする整理は、にわかに首肯し難いものとなっている。たとえば、横川は、宇野の『経済学方法論』<sup>9</sup>のうち、「資本の構成のさらにいっそう急激なる高度化は、生産力の増進をともしつつ、……純粋化の傾向を逆転し、金融資本の時代をその末期的現象とともに現出する」(宇野[1962]28頁)という部分には、「資本の有機的構成の高度化によって内生的に」資本主義の非純粋化と没落が説かれているとして、「『目的論』の要素がはっきり認められる」(162頁)とする。他方、「マルクスが『資本論』を執筆した当時には予想を許さなかったような発展が、資本主義のその後にみられることになったのであって、我々は、もはや単純に資本主義の発展はますます純粋の資本主義社会に近似してくるとはいえなくなっている」(宇野[1962]21頁)の部分では、「資本主義の非純粋化は、理論的には予測不可能な、外生的な発展によつてもたらされる」(163頁)として進化論的との評価を与えている。だが、「理論的に予測不可能」であることが、「外生的」すなわち理論的に内在的な説明が不可能なことを意味しないことを措くとしても、マ

<sup>9</sup> 宇野[1962]。ただし引用は『宇野弘蔵著作集第9巻』より。

ルクスの時代に予想を許さなかったとする発展を、もっぱら外生的なものだと宇野が認識していたとする解釈には無理がある。自らの理論である「有機的構成の高度化」説が、当時の状況によって実証されたとみていたマルクスに対し、後の後進国ドイツを典型とする重化学工業の発展というマルクスの予想不可能な事態のうちに、かえってその理論が妥当することになったというのが、宇野の基本的な図式であることからすれば、二つの引用部分での宇野の歴史像はやはり同じものであろう。

また、「もちろん資本主義も、一社会を全面的に商品経済をもって支配しうるものとして歴史的な社会をなすものであり、」（宇野[1962]52頁）という部分が「還元主義に陥っている」と批判されている。そもそも「支配しうる」という表現が、他の諸関係の存在を前提としていることは措くとしても、「しかし経済原則を商品形態を通して経済法則として実現する資本主義は、その経済法則自身をもそのものとして実現するものではない。」で閉じられ、「経済法則の展開を阻害する諸条件」の言及へとつながるこのセンテンスの冒頭部分をもって、「完全に純粋な資本主義社会が社会として実在しうると考えている」（163頁）とする解釈も強引である。例によって晦渋な表現であるが、少なくともここで論じられているのは、純粋な商品経済社会という理論モデルの抽象可能性にかかわるものであろう。

ここでも「還元主義的」というレッテルは、抽象的・演繹的な理論的営為そのものの否定に行き着いてしまっていないだろうか。だが、たとえば、「特殊中間理論」に妥当しない事実の発見に対して、例外として処理すべきか、それともその「特殊中間理論」そのものを改訂ないし棄却すべきかを判断する基準は、当該「特殊中間理論」のなかには含まれていない。「実証」に依拠してアドホックな説明に徹するだけではなく、歴史と理論を再統合するというのであれば、「特殊中間理論」を取捨・再配置していく理論的な基準を構築しなければならない。そのような理論領域を「中間理論」と呼ぶとしても、それは単に帰納的にのみ得られるものではあるまい。演繹的なアプローチと帰納的なアプローチとの統合を含んだ「歴史的アプローチ」でなければ、「マルクス」や「宇野」という形容詞を付与する意義も見出し難いであろう。

## VI. 読み終えて

以上、難渋をきわめながらもとりあえずは読み通してみたことで、ようやく著者間の対立や近接関係、あるいは相互の影響関係などが少しずつ垣間見えてきたところであろうか。この五つの論稿は、同じ研究集会を契機とし、集会の場での報告と、その後のニュースレター等を通じた報告記録やコメントの発表等を通じて、多少なりとも相互に参照しつつ纏められたものである。もちろん、同じ時代状況の中で、「宇野理論を現代にどう活かすか」という観点を共有する程度には共通の基盤に立っもいる。表記されているもの以上に、相互に意識しながら考えられ、論じられているところもかなり多いようであり、異なった概念や語彙を用いても、対話を求めあい、またそれが可能となりつつある部分も、少しずつ見えてきたように思われるのである。他方で、同じ概念、同じ語彙で異なる夢を語っている部分もまた多いのであるが。

したがって、いまようやく、建設的な意味のある批評に挑みうる入口にたどり着いたの

かもしれない。しかしこの先の作業には、いっそうの困難が予想される。この拙い彷徨の記録でも、著者の諸氏をはじめ、先達の人々の教えを受けるための役には立つであろうか。